初等外国語教育法　10月20日（火）の授業リフレクション

＜アンケート結果＞



＜授業のリフレクション＞

①今回の講義でインプットとアウトプットがセットで行わなければ言語習得の効果はあまり出ないということが分かった。このことを踏まえて自分の小学校・中学校・高校の英語の授業を振り返ってみると小学校の授業では先生の言っていることを真似するだけの授業だった。中学校では先生の後に続き文を読んだり、洋楽の歌詞をみて歌う授業と文法の授業の両方をやっていた。高校になると担任の先生が英語の教科担任であったため、今までの英語の授業よりもグループで話すことが多かった。自分で文章を書き発表し意見を交換する等の活動を主に行った覚えがある。この時に感じたのが、読める英単語は書くことができるが、読めない英単語は書くことができない。逆に、かける英単語は読めるが書けない英単語は読めないという関係に気づき不思議だなと思った。今思えばこれこそ、聞くだけでなく話すことで言語の習得に繋がるという事だと理解することができインプットとアウトプットの大切さを感じることができた。（名前がありません）

②今回の講義で一番印象に残ったのは、インプットとアウトプットについてで、私は今まで英語は成績は悪くなかったけど、英会話の活動になるとどうしても苦手意識があって辛いと感じていました。しかし先生の講義を受けて私は、インプットを成績を保つためだけに行っていて、アウトプットするための学習を行うという意識が足りなかったのかなと感じました。学校の限られた時間の中で、どのようにして最大限に子どもたちの学習を意義あるものにできるかを考えていく必要があるのだと感じました。（名前がありません）

③インプットもそうですが、アウトプットの大切さを学びました。たしかに、単語や文法をたくさん学んで頭の中にしっかり入れても、アウトプットする機会がないと、言語は習得しないということがよくわかりました。また、中学校でも高校でもインプットとアウトプットの学習はとても多かったんですけど、中学校の学習は英語の先生やALTの先生と楽しく話すような学習でしたが、高校では受験勉強のために、単語を必死で覚えて単語テストで８割取るというような、トキメキやワクワクがない英語学習でした。いろんな方法のインプットとアウトプットがあって、またそれによって人には合う合わないがあることも学びました。（名前がありません）

④goの過去形をgoedと間違えた児童に対して、goの過去形はwentだとただ指摘・注意するのではなく、過去形の規則変化は習得できていることに気づき、その部分を褒めた後に動詞の過去形には不規則の変化するものもあり、goの過去形はwentになるということを説明すべきだと学んだ。小・中・高校の授業で、英語の先生とALTの先生が話しているとき、その内容が所々しかわからず蚊帳の外のように感じたことがあったので、わからない，ついていけないことで子どもの学習意欲を損なわないように児童・生徒の現在の現在の能力を把握して子どもがおおむね理解できるようなわかりやすい内容で話すことも外国語教育において必要なことだと考える。

⑤今日の講義では、学習者が外国語を学ぶことについて考えた。外国語を高度なレベルまで学ぶためには、高度なレベルで教えられることが大切というわけではないという意見に納得した。私の小中学校の頃に、自分のレベルにあっていない、授業や英会話のレベルに翻弄されて、楽しく学ぶことはおろか英語の理解さえもできなかった。講義中によく出てきた、「インプット」これができていなかったためである。インプットをするには、学習者が理解できるレベルでの教授が必要である。学習者が英語の授業で疎外感を感じてはいけない。学習者たちのレベルを理解したうえで、インプットの機会を多く与えてかなければいけない。そのためには教師が教材を工夫したり、英語でのコミュニケーション、フィードバックを大切にすべきだと感じた。

⑥今回の講義を通して、英語の言語学習においてこれまでの英語の授業での学習様式は、言語学習はできていたが、それを応用することができずに終わっていた。今思うと、もっと工夫の使用があったのではないかと考えられる。教科書にのっとって学習するのではなく、覚えた単語を使い、日記を書くなどインプットアウトプットを利用して学習するのもありだと考えた。

⑦インプットやアウトプットをバランスよく活動に盛り込むことが重要だと改めて分かった。現在のレベルより少し上のレベルに挑戦することで言語習得を進めることができると分かったが、様々なレベルの子が混在する教室でどのようにレベルを設定するか考えるのは難しいと感じた。子どもが楽しさを感じながら学習できるよう、状況に合わせて指導計画を立てられるようになりたい。（名前がありません）

⑧グループディスカッションで出た「文法や単語などを学んでいた中高より、小学校のほうが英語が話せていた」という意見に共感しました。中高だとどうしても受験のことを考えての授業になると思うので、なかなかアウトプットの時間が取れないのではないかと思いました。母語を習得する際にはコミュニケーションの中から学んでいくので、小学校で英語でのコミュニケーションを多くとることが大切だと考えました。

⑨今回の講義では、外国語（英語）に限らず言語を教えるという点について深く考えることができました。私自身今までの英語の授業では単語と文法を中心とした指導を受けていました。しかし、やはり言語を学ぶ上ではたくさん喋りたくさんその言語に触れ間違えもしながら積極的に学ぶことが必要であると感じました。そのためにはやはり、文法を中心とした座学ではなくコミュニケーションを中心とした主体的な学びが必要になってくると改めて感じました。しかし、その中で今までの教員の方々も大学ではこのように学んできたはずなのに実際の学校現場では文法を中心とした授業展開がされているという点に今まで自分が受けて来た教育や実際の授業の時間数そして、指導要領を踏まえると主体的な学びを行うのは難しいのかなどといった疑問も生まれました。私の中にはまだまだ外国語という教科に対しての引き出しが全くといっていいほどないので、これから学んでいきたいと改めて感じました。（名前がありません）

⑩第二言語習得について、インプットだけでは今自分がどの英語が使えるのか分からず、アウトプットするときにはじめて自分のレベルを知るので、授業外の宿題などでアウトプット(作文・日記など)をおこなっても、英訳アプリなどで済ませてしまう生徒もいると思うので、そうすると本当の言語習得の大事な部分が抜けていしまうので、先生の見ている授業内でしっかりとアウトプットできる機会を作らないと意味がないと思いました。

⑪今回の講義を受けて、外国語の授業の仕方について考えさせられました。高校の時はインプットしようにも関連付けられないため覚えられず、「あふれていなかった」と感じました。私は小・中学生の時に文法を意識したことがなく、準２級を取得していても「前置詞」や「関係代名詞」などの言葉を知らずに感覚で学んでいました。その時には音読や簡単なストーリーを読んだりしていたので、無理に文法を知らなくても、何度も触れたり文脈から理解したり楽しんだりもできるのかなと考えました。それと関連すると、「中間言語」や「チャンク」の部分がとても共感できました。単語1つ1つが意味があって分かれていると知らず塊で覚えていたのですが、これも方法のひとつなのだと知ることができました。中間言語は学びのプロセスには必要ということを知り、子どもたちが模倣ではなく、自分が学んできたことを整理できているが故の間違いもあると知りました。外国語を教える際に、叱るのではなく、このような視点を教師が持てたら、これからの外国語教育も変わっていくだろうと感じました。

⑫今回の講義を受けてまず、指導者として言語はどのように学ばれていくのか知ることが重要であるなと感じた。オウムのおかえりは言葉の役割を果たしていないということが一番心に刺さり、言葉とは何なのか言語習得は何なのか教員になるにあたり深く考えていきたいと思った。また、インプットとは何なのか「聞く」ではなく、「わかる」とは何なのか、指導時間が限られている中で授業をどう工夫していくべきなのか、正解はないと思うがそのことについて考える力を身に付けていきたい。

⑬私たちが受けてきた教育と、教えていかなければいけない教育とにギャップを感じるのは、学習指導要領の違いが大きいのではないかと考えました。現在は、コミュニケーション重視にシフトしていますが、これから教えていかなければいけない私たちは、その習得が十分ではありません。文法を中心に学び、文法が中心のテストを受けてきたことも大きいのではないかと思いました。今後、コミュニケーションを重視するならば、評価の方法も大きく変わっていく必要があるのではないかと思います。また、言語習得に関しては母国語と第二言語の習得が同じ方法であっていいのかと疑問に思いました。これまでの、生活や取り巻く文化の影響を大きく受け出来て、いざ第二言語を習得する際に母国語と同じように習得できるのでしょうか。それこそ、小さい頃から外国語に触れ、場面に合わせて脳をシフトできるようになる必要があるのかなと思いました。（名前がありません）

⑭今回の講義を通して、インプットだけではなく、アウトプットがどれほど大切か考えらされました。確かに、英語の字幕の映画を見ても、英語取得はできません。インプットには質が必要になる。その質を高めることが必要になります。今日の講義で出てきた、絵本を見た後に、感想を英語で書くというのは、すごくいいと思いました。インプットした後に、何かやるべき課題があれば、今から行うインプットを集中して行うようになります。インプットの質はちょっとの工夫で変わるようになるということを知りました。自分が教師になったら、子どもたちに自分が経験した言語習得の方法を当たり前のように行ってはいけないと思いました。今回の講義を受けなかったら、自分が習ってきたように教員になっても言語教育をおこなってしまっていたかもしれません。言語習得は、単なる記憶ではなく、創造的なのもなので、自由に子どもたちが学べるように教えないといけないと思いました。子どもたちの中間言語は、子どもたちが真似をして言葉を発しているのではなく、自ら考えて自らで、作り出して話しているということを知りました。確かに、赤ちゃんも話す言葉がちょっと違ったりしています。その時も自分自身で言葉をそのように話そうか考えている過程ということを知り、これから、発展しようとしていたんだと思い、いいことだと思いました。中間言語は悪いことではないということも今回の講義で学びました。（名前がありません）

⑮今回の講義では言語習得は、まねることではないということがとても衝撃だった。小学校の時の英語学習では先生の「repeat　after　me」に合わせてくりかえしているだけだったので、そのような学習では言語は身につかないということが分かった。また、小学校の時にインプットが大切だということを聞き、具体的にはどのような指導が大切なのかが疑問になった。インプットの過程で子供たちが理解することがとても重要だということも理解することが出来た。

⑯今回の授業は、今までの自分の英語の授業で思い当たる点がとても多い内容でした。例えば、小学校の英語の授業でALTの先生がずっと英語で話していて、それを担任の先生が訳すのをただ待っていた経験があったので先生が言っていた様に、理解できていない内容の音声をひたすら聞いていても学習になっていなかったんだと改めて感じさせられました。 　グループディスカッションではいろんな人の小学校の頃の話が聞けて面白かったです。特に、道案内のフレーズを授業でやってそれが実際に観光客に会った時に使えたという人がいて、自分だったらそういった場面になっても積極的に話しかけようとしなかったと思うので授業の内容も大事だけど、自分が習ったことを使ってみようとしなかったことも英語に対して苦手意識を持ってしまっている理由だと感じました。 　今日の内容で一番残っていることは、「習慣形成論」である真似をすることで習得されるという考えと、「言語生得論」であるように子どもが理解できる内容で英語を聞かせて習得することを目指す。という大きく分けて2つの考えを持つことが小学校の英語を教えていく中で重要だという話が印象的でした。これから具体的に学んでいくと思いましが、この考えを軸に持って学んでいきたいと思います。

⑰私は、今回の授業の中での話し合いを通して、第二言語習得の特徴を学んだうえで、自身のこれまでの英語の授業を振り返りました。特に、第二言語の取得の特徴の中で特に印象的だったことは、インプット仮説や社会文化理論のところでも記されていたように、「自分の力で解決できるもの」や「自分のレベルより少し高いレベルのもの」を提示することが大切だということです。私が高校生の時の学習を振り返ると、授業で扱う長文の難易度が私のレベルより高かったように思い、このことが、私が高校時代に英語に対して苦手意識を持つようになるきっかけだったのかなと感じました。実際に次は教師の立場で授業を行うとなった場合、様々なレベルの子ども達に対応していけるように工夫をしたいです。でも、具体的な方法が今はあまり思いつかないので、様々なレベルの子ども達に対応するための方法として、大城先生の考えやこれまで実践されている方法などがあれば、教えて頂きたいです。 　また、今回のグループワークの中で、これまで英語の授業の中で映画を見たり、音楽を聴いたりして楽しかったけれど、あまり自分の力が身についた感じがしなかった、という意見がありました。それは、映画や音楽の中で使われている言語のレベルが高かったことが原因だと思うので、教師が子ども達のレベルに合った曲を選択したり、映画や音楽を聞かせる前にポイントとなる表現を提示したりした方が良いのかな、と思いました。

⑱本来の言語習得は、機械的な練習では習得に直結しづらく、単なる記憶や模倣ではなくソウゾウ的な面があることを知りました。学生の時は、教科書の一文を抜き取って復唱したり、使わない単語を覚えさせられたり、暗記によって点数を稼げる定期テストが目立っていました。しかし、今回のグループ活動の中で、リスニングを聞いた後に復唱をしてインプットとアウトプットを並行して行う活動もすごく身になるという話が出てやはりインプットとアウトプットは学びにおいて意識するべきことなんだなと気づきました。しかし、ただリスニングをさせるだけでは、インプットにつながらず、子どもたちの学びの手助けにならないということを先生の話から理解しました。グループの中で出た例はおそらく何かしらの工夫があって楽しく、学んでいる意識を実感させることができたのではないのかなと思いました。インプットは言語取得において欠かせない最も重要な要素であることは今回の講義を通して理解できました。そのインプットを質の高いものにし、そして児童生徒の興味関心を引き付ける内容にするような工夫が今後の外国語教育に求められます。身近な話題提起やポップな教材を用いるなどをして子どもたちの主体性を失わないような工夫をこらせるように教師としてのスキルアップを図りたいです。

⑲今回の授業を受ける前は、母語でない言語を習得するには子どものはやいうちから行うことが一番で、その時期を過ぎると習得するのに時間がかかってしまう、ということぐらいしか分からなかった。しかし、授業を受けて母語習得と第二言語習得には相互に関係し影響しているということを学ぶことができた。第二言語習得も母語習得のように、オウムのように繰り返すことを重要視せずに、間違えながらどんどん言語を習得していくから、その間違いの過程で教師が怒って子ども達を批判するようなことをしてはいけないと感じた。私が中学生の時に週に１回絵本を読んで、その感想や考え、あらすじなどを書くという授業があった。そこでの絵本は英語を母語としている国の幼児ぐらいが読むような量と内容と文章（文章構成）で、中学生からしたら少し簡単ではあった。しかし、意味が分かり簡単な表現で書かれているからこそよりインプットしやすくもなるし、それを積み重ねていくことでさらに高度な言語習得へとつながっていくのだなと、今回の授業を受けて思いました。また、言語習得には聞くことだけでなくそれを使って交流することも大切だと感じました。なので、児童に授業する際には、聞くことプラスそれを児童同士で交流させていこうとも思いました。（名前がありません）

⑳生徒側として、今まで文型練習の様なやり方が主流だったと思いました。きっと先生たちも同じ様に「実際こんな会話する？」と思いながらも同じように生徒側でこの様に習ってきたからこのやり方しか分からないのかな、と感じました。蚊帳の外という言葉がすごく印象に残りました。小学校の頃の誰しもが一度は感じたことがある心情だと思います。こう考えてみると、小学校でALTは要るのか、とも感じてしまうし、小学校で英語の導入は早過ぎないか？とも考えてしまいます。第二言語を習得するには早い方がいいということを意識しすぎて焦りすぎてしまっていないか、などまた同じ問題を永遠にぐるぐるしている感覚になります。人それぞれ英語が難しいと感じる瞬間は違うけれど、どの教科にも共通して言えることは、ただ聞くだけの授業はつまらない、という事だと思います。子どもたちが楽しいと思える授業を作ることが教師にとって1番難問で、醍醐味なのだと痛感しました。

㉑インプットとアウトプットをバランスよく活動に盛り込んでいくことが重要だということが改めて分かりました。現在のレベルより少し上のレベルを学習することで、言語習得を進めることができると分かったけど、様々なレベルの子が混在する教室で、どのようにレベルを設定するのか考えるのは難しいと感じました。子どもたちが楽しく学習できるように、活動の内容や難易度を状況に合わせて考えられるようになりたいです。

㉒今日の講義では、自分の今までの授業を振り返ってグループで意見交換をした。中学校の時などは暗記中心で次の日は忘れてしまってしまったり、問題を解く時も例文を写すだけで実際には英文を読むことが出来ず、英語が苦手になってしまうという意見があった。また、もともと洋楽などで知っている言葉などは覚えていて書けないけど話せるという意見もあり、理解可能なインプットの大事さに気付くことが出来た。また、私は塾でアルバイトをしていて英語を教えることがあるが、不規則動詞の問題で生徒が間違えたとき、どのように教えたらよいか分からずとりあえず答えを教えていたが、自分自身で動詞のルールを考えていたことを褒めて英語が楽しいと思ってもらえるような指導をしたいと思った。(稲福奏)

㉓私が中学生の頃の英語の授業は「Repeat after me」と言って、先生の真似をする活動が圧倒的に多かったので、今回の講義で「言葉を繰り返す、言葉をまねるプロセスが中心になってはいけない」ということを知って正直驚きました。グループワークでは「試験のための英語を学んできたのではないか」「今の指導要領と自分たちが受けてきたものがそもそも違うから」という話が出てきて、結論として、これからの授業は双方向のコミュニケーション重視でなければならないと話し合いました。また、言語習得の理論を当てはめて考えると、親が子どもに話しかける時の簡単な日本語のように、教師も子どもが意味を理解できるレベルの優しい英語を使うようにすることも大切だとわかりました。最後に、私は「言語習得に間違いはつきものだ」という話を聞いてハッとさせられました。私は塾で中学生に英語を教えていたことがあり、その時に不規則動詞がどうしても覚えられない生徒がいました。私は初めの方は優しく指摘しましたが、何回も続くと「前も言ったよー」と厳しい言い方になっていました。間違いも勉強の１つであり、そこを責めてはいけない、私はその状態からどう指導をしていくか、そこを考えればよかったと今更ながら反省しました。

㉔私は、今回の授業を通して、母語習得研究と、第二言語習得研究は、外国語教育に大きな影響を与えてきたということを知り、母語がどのように習得されるのかを知っておくことで、外国語教育にも生かすことができると学んだ。また、言語を習得するためには、機械的な文型練習ではなく、相互交渉主義的アプローチが大切となるということを学び、子どもたちに外国語の授業を行う際は、ただ言葉を聞かせるだけでなく、子どもたちが分かりやすい言葉を聞かせることが重要であると学んだ。他にも、小学校の英語の授業では、具体的な場面を用いて教えることでイメージしやすくなるため、このような工夫をすることも必要であると考えた。さらに、言語習得は間違えて学ぶものであり、間違えは言語習得のプロセスにあるという考えを常に教師は頭に入れておくべきであると強く思った。そして、私がもし教師になった際は、間違えた子どもに対して注意するのではなく、自分でルールを作ることができたことに対して褒めてあげたいと考えた。また、グループでのディスカッションを通して、言語を習得するには、インプットが大切であり、言語を蓄えた上でアウトプットしていくべきであると考えた。そのため、どのような授業を行えば子どもたちがインプットしてくれるのか考えることが教師の役目であると考えた。

㉕今日の講義では、小学生に英語を教えるときのポイントがいくつかわかりました。特に、インプットも大事ではあるけれど、アウトプットすることでインプットされた内容を深められたり、間違いに気づくことがわかりました。私が小学校の時は、単語や文法は教わらず、簡単なゲームを行なっており、特に英語の何かが身についたかは実感が湧きませんでした。授業で簡単な単語を取得して、それを活用できるような簡単な会話をグループで行ったりする活動を取り入れたら良いのではないかと考えました。

㉖今回の授業では、言語習得の指導法について考えたり、これまで受講してきた英語の授業について考えた。今回の授業で印象に残っていることは、教師の発した言葉をリピートする授業は意味のあるものかという議論である。グループワークのときに教師の言葉をリピートする授業についての議論を行ったが、グループの全員がこれまでの授業でこのような授業を受けた経験があり教師が言ったことに何も違和感なく繰り返して真似をしていたと言っていた。私自身も教科書の読み合わせや初めて学ぶ単語のときに教師の言葉をリピートして発音練習した。その結果発音練習や適切な読み方ができるようになるためにリピートすることは大切だと思うが、ただリピートさせるのではなくしっかりと意味を伝えながら行うことが大切だと感じた。更に、リピートした文章を二人一組になって一文ずつ練習したり会話のようにつかって、実践的な練習を行うことでアウトプットする機会になると考えた。これまで私たちが学習してきた英語は試験のために文法や単語重視で学んできたが、これからの英語教育ではコミュニケーションをメインに実用的な学習に変化していくのかなと感じた。

㉗（二重投稿となっていましたので削除しました）

㉘第二言語を教えるためには、どのように言葉が習得されるのか理解する必要がある。外国語はかつて、真似をすることで身につくと考えられていた。しかし、繰り返すだけでは身についていないことが分かった。言葉を習得することは、易しい言葉で語りかけ、交流を通して学ぶ必要があるのだと、本講義を経て理解した。自分が授業をする立場になったときには、出来るだけ分かりやすい簡単な言葉を繰り返し用い、対話を中心に行うことを心がけたい。

㉙（2重投稿になっていましたので削除しました）

㉚今回の授業では、母語習得と第二言語習得について学んだ。母語習得では、赤ちゃんが言葉を覚えるように外界の言語情報に触れると自然に短期間に完璧に言語を習得できるが、第二言語習得はそうではないということが分かった。まさに、海外ドラマを見る自分が例であった。見ているだけで聞いているだけでは何も身につかないというところに共感した。程度の単語力がないと内容が理解できないので暗記科目の学びはだめという風な風にあるが言語に関しては、ある程度の暗記の学びも必要なのではないかと考えた。実際に小中高を振り返ってみると、台湾人との交流で実際に道案内する場面があり、アウトプットする機会があったという意見や中高はインプットばかりで小学校方が学ぶ内容は少ないがアウトプットが多くて英語を習得できている気がしたなど「アウトプットする」ことの大切さについて考える機会になった。また、最後の方には、小学校の外国語で指導者として担任が求められているのはなぜなのかという話で、注意しないといけないことがあった。ALTと担任の間で児童を置いてきぼりにしないということである。何気ないことではあるが、学ぶのは教師or ALTではなく児童だということを再認識して授業を作っていきたいと感じた。

㉛授業お疲れ様でした。 授業で印象に残ったこととしては、文型練習についてです。授業の中では、文型練習のような学習スタイルは学習の中心として行う学び方ではないということを学びました。でも、授業の後に自分なりに考えを整理してみると、小学校で行う外国語の授業や活動は文型練習のような学習スタイルを中心としてもいいのでは無いか？と考えました。その理由としては、小学校6年生の妹の様子を見てそう感じたからです。自分の妹は学校で覚えてきた文系を使って「英語できるよ！」と自慢してきました。それは文型練習を通して、外国語への興味や関心が持てたり、それを高めることができた、さらに妹自身の自信つながったと考えられます。教育に関わる偉い人たちや学校現場では、小学校という早い段階(遅いと感じる人もいるかもしれない)で言語習得を今よりもレベルアップするべきであるとしています。しかし、自分たちの経験や周りの子どもたちを見ていると「ほんとうに可能なのか？」と感じてしまうほど、スキル的にはまだまだだと言えます。だから、外国語や外国に興味を持つことが出来たり、子どもたちが「自分は英語が話せるぞ！」と思えるような自信を付けることの出来るような授業、文型練習のような授業スタイルを中心としてもいいのでは無いかと考えました。子どもたちにとって「外国語を学ぶ楽しさ」を伝えるための授業形態はこれだけでは無いと思うので、この問題を考えるのはとても難しいです。もっと自分なりに考えを固めては壊して進化―！というプロセスを何度も踏んで、外国語のよりよい学び方を見つけたいと思います。（名前がありません）

㉜（二重投稿になっていましたので削除しました）

㉝私の中学の英語の授業はその日に習ったpartから本文の一文を取り、先生の後に続いて発音に注意しながら繰り返し言う授業や、本文を丸暗記して先生の前で発表というような授業展開であった。当時の私は恥をかかないように英文を覚えることに必死でその文と対応している日本語と照らし合わせてみることなどはしていなかった。また、数時間経てば必死に覚えた英文までも忘れてしまっていた。今この講義を受けて考えてみると、このような英語の授業は無駄だったのではないかと考えてしまう。たしかに子どもたちに英文を繰り返し読ませたり、ひたすら英文を覚えさせるのは教師にとっては楽な授業展開であるが、それだけで子どもたちにインプットアウトプットした気になってしまっているだけで、肝心な子どもたちの学習には繋がっていないのではないだろうかと考えさせられた。そして、高校では文法などの問題が多くなっていった。この時の私はただ文章を規則的に組み合わせていただけでだった気がする。しかし、問題文に洋楽で聞いたことがあるフレーズが出てくると、スラスラ解けていたように感じる。このことから、まずはその文章に対して子どもたちが興味を持たないと質の良い学習にはならないのではないかと考えた。わたしは音楽などを用いて、子どもたちの関心をひいた上での授業展開をしていきたいと考える。

㉞今回の授業はWIFIの調子が悪かったのか、何回か落ちて音声もたまに途切れてしまったためあまり理解することができませんでした。後から資料をみます。グループワークではビンゴゲームを利用して単語を覚えているかのチェックをしたという人もいれば、一年間ただひたすら単語帳の単語を覚えるだけの授業だったという人もいて、同じ単語記憶でも先生によってアウトプットしていくタイプかインプットしていくタイプか分かれるなと感じました。また、絶対に褒めてくれない先生がいたという話を聞いて、外国語の授業に関わらずそれは良くないと感じました。テレビやラジオの会話だけで言語能力は身につくのか、や6歳（８歳？）まで動物に育てられたこの話を聞く限り私たち人間は適した時期に適した方法で母国語を獲得しなければならないことが分かりました。それを基に第二、第三と他の言語を獲得していくのだと思うます。

㉟ネットの調子が悪くて途中でズームが落ちたりしたため先生の話が途切れ途切れになってしまいました。今回の授業で先生が韓国語を習っていたが実践には至らなかったという話を聞いて自分も英語を習ってはいたが実践出来るかと言われればできないと思った。単語や文法を教わるだけではダメだと言うことを実感した。

㊱グループワークでインプットとアウトプットがバランスよく取り入れることが理想だという話になった。しかし、中学、高校時代はインプットばかりの授業が多く、アウトプットをやるといっても、例文の真似のようになってしまい英語力が身についたようには感じられなかったという意見もあり、アウトプットを授業に取り入れることはとても大切だが難しいことだと実感した。

㊲母国語の習得方法についての様々な考え方、そして、それを踏まえ、意識した外国語の習得方法というものについて今回の授業で学んだ。様々な考え方を自分自身の過去に当てはめ自分自身が過去にどの様な方法を持ってして母国語をここまで流暢に扱うことができる様に至ったのか体験者の視点から考察してみたが、明確に思い出せない、また、そもそも記憶していないかもしれないという不可解な疑問にぶつかったという気がした。この疑問を踏まえると、自分の中ではL A Dが子どもには備わっており、自然または無意識の世界で言語習得を過去に行ってきたから、そもそも記憶するという活動に至らないという事が起こり、母国語の習得方法を記憶していない状況が現在の自分に起こっているのではないのかなと思った。また、なぜ習得するのかといった原点的なものを考えた時、自分の意思を親や周りに伝え、生きていくために母国語は習得されるといった事が考えられるので、外国語とは習得の必要度が圧倒的に違うと思う。したがって、必要度が低い外国語は自然と母国語とは習得方法に違いが現れ、母国語よりも習得の難易度が高まるのではと感じた。（名前がありません）

㊳今回の講義では、外国語（英語）に限らず言語を教えるという点について深く考えることができました。私自身今までの英語の授業では単語と文法を中心とした指導を受けていました。しかし、やはり言語を学ぶ上ではたくさん喋りたくさんその言語に触れ間違えもしながら積極的に学ぶことが必要であると感じました。そのためにはやはり、文法を中心とした座学ではなくコミュニケーションを中心とした主体的な学びが必要になってくると改めて感じました。しかし、その中で今までの教員の方々も大学ではこのように学んできたはずなのに実際の学校現場では文法を中心とした授業展開がされているという点に今まで自分が受けて来た教育や実際の授業の時間数そして、指導要領を踏まえると主体的な学びを行うのは難しいのかなどといった疑問も生まれました。私の中にはまだまだ外国語という教科に対しての引き出しが全くといっていいほどないので、これから学んでいきたいと改めて感じました。（名前がありません）

㊴今回の講義を受けて、まず言語学習は聞くことなどのインプットはもちろん重要であるが、そればかりではやはり発達しづらく、アウトプットとしてその言語を使うということがとても重要だと感じました。私は小中高と、アウトプットという作業をほとんど授業でしてきませんでした。授業では、文法や単語などをインプットする授業ばかりで実際にそれを使って会話をしたことはほとんどありませんでした。高校ではとくに、早朝授業（ゼロ時間目）で徹底して文法演習をやりました。しかし、あれほどやった文法も今ではほとんど覚えていません。やはりインプットのみでは言語習得は難しいということを身に染みて感じました。 今思い出したことなのですが、高校2、3年生の時には、英語の教科書はあるけど一切使わず、センター対策ばかりやっていました。受験中心の授業では、英語を喋れるようにはならないとつくづく感じました。私が教師になった際には、インプットもアウトプットも両方織り交ぜる授業を作れるようにしたいです。

㊵私にとってALTの方との授業はすごく楽しかった記憶があるのですが、グループでの意見交流の時に「テンションが高くて、ついていくのに必死だった」という意見があり、人によって感じ方は違うんだなと思いました。教師が子供たちに楽しんでもらおうと思ってやってることが、逆効果になってしまっては悲しいので、クラスの雰囲気など子供たちに合わせて、取り組み方を考えていくことが大切だなと改めて感じました。 「最初から完璧にできることはない」例にあったように、文法を間違えていても自分なりに作っていく、そうやって色々経験しながら、成長していくんだということを自分にしっかりと言い聞かせていきたいと思います。 私は、高校の時にずっと単語を覚えることを授業でやってきたので、今日意見で出た「日記を書く」を実践してみたいなと思いました。

㊶小学校の英語ではALTの先生の話す英語を聞いていたという点である意味インプットする活動ができていたと思う。中学校では教えてくれる英語を覚える感じでアウトプットできるような活動はあまりなく、高校ではインプットもアウトプットもあったが、インプットもアウトプットもそれぞれやり方がありみんな違って面白いと感じた。話し合いの中でインプットアウトプットをしっかりやってもやはり英語に対して良いイメージや興味を持っていないとなかなか頭に入ってこないのではないかという話が出た。今までの授業を含め英語活動を振り返ってもちろんアウトプットする機会もあった方が身についていたと感じたが、興味関心があった方が身についていたと感じた。インプットで知識を蓄えることと英語に興味を持つための導入であるためにも小学校の英語活動にゲームやイベントがあること、ALTの先生と楽しむことは大事なことだと思った。

㊷今回の講義で、英語を学習する際には子どものレベルに合った英語を用いてインプットとアウトプットを交互に行いながら言語学習を行うことが大切だと学びました。単に真似るだけでは不十分な学習になることも学びました。私は中学生･高校生のころ、文法を習い、それを活用して文章を作るという活動が主でした。しかし今、忘れてしまった文法も多く、即座に英語を話せと言われてもなかなか話すことができません。子どもが難しいと感じたらインプットできないということがよくわかりました。子どもにわかりやすい英語を使ったり、ジェスチャーや絵を使ったりして、子どもがインプットしやすいように工夫したいと思います。

㊸今回の講義では、外国語の習得について理論的に学習した。input、outputが大切なことはわかったけど、ただinputするのではなく、内容をしっかりと理解していること、それを踏まえた上で、活用しながらoutputすることが大切だと感じた。実際、単語を覚えてテストをするという流れも、input、outputしていると言えるが、本当に活用できるかと言われるとそうではないと考える。覚えた(input)した単語を使って、日記を書く、話すなど自分の生活と関連づけてoutputしていくことが大切だと感じた。私が授業をする際には、意味のあるinput、outputを意識していきたいのと、色々な授業を見て子どもの実態に合わせながら、その方法を考えていきたいと考える。

㊹本日の講義では、母語習得のプロセスの観点から、外国語教育について考察した。自分が、日本語を習得してきたプロセスを振り返るとただ記憶することや親の言語の模倣ではなかった。例えば、「おばさん」という言葉を知る前は、「いとこのお母さん」と呼んでいた。このように、わからない言葉も、わかる言葉で表現できていたし、その都度周りの大人に新たな言葉を教えてもらったり、どこかで聞いたりしながら言語を習得してきたように思う。外国語も、反復的な発音練習など機械的な学習ではなく、はじめに簡単に理解しやすい単語を使いながら、教師と子どもがコミュニケーションを取れたら、より親しみやすいのではないかと思う。また、自分自身が受けてきた英語の授業を振り返って思ったことは、私の地元では、台湾人の観光客が週に２回船に乗ってきて、英語で道を聞かれることが多かったのだが、道案内の定型文を習ったあとに実際にそんな場面に出くわして、習ったことを仕えた時は、とても嬉しかった。このように、具体的な場面で学ぶというのも、外国語教育にとって重要なことだと思う。

㊺今回の授業を受けて、外国語を習得するための過程として、教員の発した用語・用例をただ単に復唱するだけでは実用的な外国語の習得には結び付きにくいということを学んだ。このことに関して講義内では、「I like apples.」や「I like desks.」という用例が実際に扱うことがあるかないかという争点を挙げて紹介されていた。説明を受けるまでの私は、「別に教教科書中にそう書いてあるのならそれでいいのではないか。」と思っていたが、この考えが外国語教育に対して受け身な姿勢を作り、積極的な言語習得の障害となっているということを受け、今まで受けてきた外国語教育が言語習得の成し得にくい環境下で行われていたことに衝撃を受けた。また、グループワークでは、教員の生徒に対する徹底した間違いの指摘や授業・テストのための英単語の暗記など、外国語教育を“やらされていた感”が今振り返ると多々あったという意見が共通して出てきた。 これらのことを外国語教育の発展に活用できるように、自分なりにどのような外国語教育を行えばいいのか方向性をしっかりと考えていこうと思う。

☞私が出した例はI like apples. ではなく，I like pens. です。どちらも文法的には何の問題もありませんが，「リンゴが好き」というのはあり得ても，「ペンが好き」というのは通常の会話ではでてこないということでした。もちろん，「鉛筆とペンとどっちが好き」という場合はあり得ますが，ふつうはあまり使わないと思います。ポイントは英文を学習する時は，どのような時に実際に使うのだろうということと併せて学習することが重要であるということです。

㊻子どもたちの言語習得にあたって、外国語の過去形などを規則にのっとって間違えたのに対し、ただ間違いだというのではなくまず褒めてから訂正するのが良い、という考えがあったが、私自身の英語教育を振り返ると間違いだと言われたことしかないように思われた。子どもたちからすれば、規則を学んで理解したうえで間違おうとしていないのに、教師からただ間違っていると言われれば学習意欲が低くなり、英語に対するイメージも悪くなるのではと考えられた。また、講義の中で、子どもたちにどのようにして外国語を聞きたい意識を持ってもらえるか、どうやってもたせるかという話があったが、私は中学校のころに洋楽を聞きながら単語を学ぶ活動を行っていた。この活動では、英文よりも馴染みやすく、自然と聞く意識をもつことができていた。このように、子どもたちが親しみやすい題材を提示できれば、意識をもたせることができるのではないかと考えた。

㊼学生の時は、文法を習ったり、長い英文を読んだり読むための単語を覚えたりなどの授業が多く、逆にそれ以外の授業何があったかといわれても思い出せませんでした。 しかし今回の講義内容で、インプット・アウトプットの重要性について気づかされ、自分が今まで参加してきた授業の中でインプットはあってもアウトプットできる場があったか、しっかりインプットできていたかという視点から学びに対して考えることができました。 グループディスカッションでは、いろんな授業例、自分が過去に受けてきた授業についてのお話が聞けたりしてまた違った視点から学びについて考えることができました。 インプット・アウトプット言葉でいうのは簡単ですが、実際これらを生徒・児童たちのなかでできるようになるのはすごく難しいという事なんだという事も実感させられました。 すぐにどうこうできる課題ではないがよりいい教材、指導法、工夫ができるようにもっと多くの意見に触れたいと思います。

㊽前回、定型文を覚えているだけであってしっかりと自分の考えを伝えられているわけではないという話があった。この話は今回の、機械的練習では習得につながらなかったということに通じていると感じた。模倣するだけでは意味を考える必要がないため、決まった部分(模倣している部分)以外は身につかないのではないだろうか。さらに言えば、模倣している部分も意味が分かっているとは言えないため実際の場面で使えるかは分からない。今回の講義を受けていて疑問に思ったことは、他国の人間が英語を学んでいる時に文法に習得する順番がある(進行形→三単現のｓ→過去分詞の不規則変化→〃の規則変化)のであれば、日本の英語の教科書もそうすればいいのに、何故そうしないのかということ。母国語としての日本語が英語含む諸外国語と比べてあまりに異質(語順が関係ない、助詞を用いるなど)な言語だからなのか。（名前がありません）

☞上記の研究は，英語が話されている国で，外国人がインプットを中心に（学校などで文法などを学ぶことなく）学ぶ場合の研究結果を中心としています。自然な環境で学ぶ場合と，教室で文法などを順序良く学ぶ場合の習得の順序は異なるという結果もでています。日本の教科書は「教えやすさ」を考えていると思いますが，必ずしもそれが「習得しやすさ」とは限らないとも言われています。しかし，自然環境での習得順序を教科書教材の配列に応用することは決して意味のないことではないと思います。さらなる研究が必要です。

㊾インプットの圧倒的不足やインプットの質も大切ということなどインプットの重要性を感じた。子どもは大人の言語の真似をいつもしているわけではないという新しい発見ができた。小学校から中学校への学習の段階踏みが必要

㊿今回の講義で、小中学校の授業についてグループで話し合うことで、改めて改善点や課題について考えられたと思います。自分の知ってるYouTuberで両親が耳が聞こえない方がいたので、どうやって勉強したんだろうときになりました。次の講義でもっと深く考えられると思うので、楽しみです。

51　今回の講義で、英語を学習する際には子どものレベルに合った英語を用いてインプットとアウトプットを交互に行いながら言語学習を行うことが大切だと学びました。単に真似るだけでは不十分な学習になることも学びました。私は中学生･高校生のころ、文法を習い、それを活用して文章を作るという活動が主でした。しかし今、忘れてしまった文法も多く、即座に英語を話せと言われてもなかなか話すことができません。子どもが難しいと感じたらインプットできないということがよくわかりました。子どもにわかりやすい英語を使ったり、ジェスチャーや絵を使ったりして、子どもがインプットしやすいように工夫したいと思います。